

「君の話は聞きたくない」は、葬儀で、「俺」が、クラスメイトの「お前」の「遺影」に投げかける言葉で始まります。

「何、笑ってんだよ」。

この一行に、まず、心がひきつけられました。

笑顔の遺影と、誰一人笑ってはいない周り。彩られた祭壇と、黒を纏った参列者たち。その対比が鮮やかに浮かび上がる冒頭のシーンの描写も、うまいと思いました。

弔辞を述べているのは担任の教師です。人気者だった亡き彼をほめたたえる長々とした弔辞を、「俺」は醒めた気持で聞き流しながら、「お前」とのことを思い起こしていきます。

小学校ではずっとクラスの中心的存在だった「俺」が、中学に入った途端、「お前」にその座を奪われてしまったこと。その座をとりもどそうと「俺」がいくら頑張っても、「お前」を追い越せなかったこと。しかし「お前」は天然で、「俺」の焦りには少しも気づかず、「頑張りすぎると大変じゃねえ？」と本気で心配していたこと。そんな能天気な「お前」にいらっとし、ついに爆発してしまった「俺」……。

そういったエピソードから、「俺」と「お前」二人のキャラがくっきりと浮かび上がってきます。「俺」の「お前」への思いもよく伝わってきます。ラストシーンは、読んでいて目頭が熱くなりました。ストーリーは、さしたるひねりはありませんが、その直球なところが、この作品では、かえって生きています。クサくなる一歩手前で押さえているところも賢明です。また、こういった語りかけの文でまとめるというのは、むずかしいものなのですが、その点でも成功しています。完成度の高い作品だと思いました。

さて、「君の話は聞きたくない」もそうですが、今回最終候補に残った作品は、いい意味でまともなものが多かったように思います。ただ、その分、おとなしいといえますか、地味な印象も受けました。そんななかで異彩を放っていたのが、「あの日起こったこと」です。

飼っていたウサギが死んで悲しむ鈴香。次の日、乗りちがえたバスで眠ってしまい、着いた終点はド田舎。鈴香はその地でUFOに乗りこみ、宇宙人に遭遇します……。

ストーリーは荒唐無稽ですが、はずむ文体が魅力的で、ぐいぐいひきこまれて読みました。作者がこの作品を、おもしろがりながら書いている様子が目に浮かんできました。物語を描くよろこびに満ちあふれていて、創作の原点というのは、こういった姿勢にあるのだと、あらためて気付かせてくれる、元気と勢いのある作品でした。

作品を生み出すのは、たいへんなことも多いですが、書いているときのワクワク感や、書き上げたときの達成感というのは、きっと皆さんも、感じたことがあるでしょう。

どうか皆さん、楽しみながら、のびのびと書いてください。

もちろん、そのあとの推敲も大事ですが。あまり小さく、まとめようとしないこと。

書く楽しさを味わいながら、作品を深めていけるといいですね。